

---

# ブロントファイター

高坂桐乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブロントファイター

### 【Nコード】

N5092C

### 【作者名】

高坂桐乃

### 【あらすじ】

ブロントはギルドブロントファイターを立ち上げた。そこでは任務を受けおい。こなしてゆく。仲間としてIQ124のブルースとボク娘のリンを仲間にし、任務をすることになった。ブロントたちはティンクを助ける任務につく…

## 第1話 ティンクを助ける、少ない時間【前編】（前書き）

もしかしたら50ページ目までに名探偵コナンのキャラクターの誰かが登場するかも……

## 第1話 ティンクを助ける、少ない時間【前編】

ここは練習場。ティンクと言う妖精がここで悪いモンスターたちに襲われている。

ここでは岩で道がふさがれてて雑草が生い茂っている。

そのティンクを助ける事こそ我らブロントファイターの使命である

……

ブロント「ティンクが捕らわれているのはここか」

俺はブロント。ブロントファイターのリーダーだ。

己の仕事とはティンクと言う妖精がスラッシュ軍に襲われているのを助けると言う仕事だ！

そしてブルースとリンを連れてやってきたのだ。

ブルース「全方にキラビー。3ターンでかたをつけて欲しいといわれているのに」

彼は冷静に考えている……

そして彼女はやる気満々だ。

リン「ボ、ボクら3人は4ターン以内にクリアしないと自衛隊に逮捕されてしまう。この任務の本当の恐ろしさだよ」

彼女は唯一の少女。武道家で蹴りや殴りが得意な奴だ。俺の仲間でも特に攻撃の力は強く怒らせたらヤバイな。

ブロント「新技エレキも習得したし」

俺は実は電磁波魔法・エレキを習得するほどの電気魔法習得レベルまで来ている。

そして習得しているんだ。

ブルース「命中率100%」

彼は判断力が長けていて命中率とかも大切にしている。  
しかし冷静すぎる事が大きい難点である。

リン「取り合図ボくらには雑魚なだけ。」

敵たちのいる場所からは俺らは凄く離れている。

敵たちは戦う準備をしておりこつちが早く手をつけないと敵がティンクに攻撃してしまう……

なのでがんばって助けなきゃならない。

フロント「2ターン目までにスライムを倒せなきゃティンクを助けられない。」

俺は皆にこのティンクの体力を考えて呼びかけた。

ティンクの体力は5、スライムはティンクに3ダメージを与える。

皆もわかったらしい……。

ブルース「良い手あり。フロントがこの位置でキラビーを弱らせてそこに僕が矢で攻撃。そしてリンがあおのキラビーを攻撃」

彼は初めのターンの行動をよく考えた。

ブルースはかなり知的は賢いからな……

そして俺らに教えている。

フロント「この方法は良さそうだ。2ターン目に俺とブルースがスライムに攻撃出来るぞ。でもブルースにも危険有りそう。」

俺はこの作戦は良いと思う。

他には作戦が考え付かない。

ブルースの考えたその作戦にしなきゃならない。

ブルース「他には方法が少ないんだ。余裕を持ち3ターンで死者なしで敵を全滅されるためには」

リン「ボクの技でクラービーを致命傷にしてあげるよ。」

フロント「作成決行だあ」

## 第1話 ティンクを助ける、少ない時間【後編】

こうして作戦は成功した。

走って敵のところに追いつく戦法にする事にしよう。

俺らは皆で思いっきり走っていた。

心臓はバクバクと音を鳴らし息も苦しい。

しかし彼女はそれ程疲れていないようだ……

リン「キラビー。オラオラオラ『気功破』」

彼女は気功破を出してキラビーに連続攻撃

キラビーB「ぎゃあああああああああああ」

キラビーBには致命傷のダメージだった。

フロント「やあああああー」

キラビーAに俺は鉄の剣で攻撃した！

キラビーから体液がドロドロ出てきた。

それが草を腐らした。

ブロント「うえっ。きたねえ」

ブルース「リーダー。我慢しろ、僕がトドメをさすから」

ブルースは鉄の弓を引き矢を打った。

飛んではねてキラビーに矢で切り裂いた。

キラビーは消滅し粉が沢山飛び散った。

ブロント「ふっ、こういう死に方するんだ。」

スラッシュ「俺らの戦いはまだ終わってない。この妖精を攻撃だあ」

その事でブロント達は

ブロント「（しまったあ。１ターン目終了時刻だった。）」

そしてブルースは

ブルース「（攻撃の反撃が出来ない。僕は元から無理だけどな。）」

そしてリンは

リン「（きつとボクが襲われるんだあー。やばい）」

キラビー×3は全部ブルースに殺人針で攻撃したのであった。

ブルース「ギアアアアアアアアアアア」





グサッ　グサッ

ブルースへ連続攻撃してきた

ブルース「HP1。敵はレベル2とレベル1。リンがレベル1なら1ターンで倒せる。猛すぐだ」

リン「一気にボクラ。決めさせてもらおう『気孔波』」

リンのソウルの力がキラビーを襲った。

キラビー「ぐっ。」

キラビーは倒れた。

ブロント「くっ。MPも足りないな『サンダー』」

威力は極限までは無かった・・・

そしてキラビーは耐え切った。

ブルース「僕の弓でトドメを刺す！」

ブルースは思いっきり鉄の弓で矢を打った。

会心の一撃だ。

急所に当てた。

キラビーにはひとたまりも無く

ティンクも助けられた。

しかしブルースは衰弱して倒れてしまった。

## 第2話 ブルースの目覚め

寒い。

僕死んだんだ。

何故か暖かいぞ。

たぶん天国だ

あれっ。痛い。

ブルース「し、死んでないよ」

そしてブロントは

ブロント「気がついたか。ブルース。」

そしてティンクは

ティンク「ブルースたん。助かった。わーいわーい」

そしてリンは

リン「ボ、ボク。すごく心配したんだからね。」

そしてブロントは

ブロント「一週間一休みしようぜ。」

その頃任務上では。

ツドム「ククク。この回復の杖と投槍とハチマキを奪え。ゴブリンとスライム」

ゴブリン「ガッテン。」

スライム「アリアリサー」

そして夕陽は

夕陽「フツ。コレぐらい。僕が相手しなくても大丈夫だ。」

そしてスライムは

スライム「この人殺すかな」

そして夕陽は

夕陽「ピュースル。このスライムから守れ」

ピュースル「わかった。『ピュースルバリア』」

そしてスライムは

スライム「僕の獲物だあー。『粘液』」

夕陽「粘液ねえ。子供だねえ。」

そしてスライムは

スライル「本名はスライルだよ。この人は僕の獲物」

そして夕陽は

夕陽「このスライム。致命傷に近い状況まで弱く攻撃」

ピュースルの攻撃は強かった。

すぐ致命傷に近い状況になったスライルだった。

夕陽「このアクアの書『上級』をスライルにやる。リーダーになれ。わかったか。この涼宮夕陽様の命令だぞ」

そしてスライルは

スライル「了解。」

その頃ツドムは

ツドム「目的。コンプリート。この草原で休みに行く」

そして夕陽は

夕陽「お前らは逃がしてやる。しかし逃げないなら死んでもらうぞ。良いな」

そしてツドムは

ツドム「ものすごい靈気が感じる。一旦引いた方がいい。引き受けよう」

そしてツドムは逃げていった。

### 第3話 任務挑戦 スライル覚醒

フロント「Dランク任務のコレにしようかな」

そしてブルースは

ブルース「Cランク任務もあるぞ」

そして夕陽が現れた。

夕陽「この草原でオーガーがこの場所の秘宝を3つ奪ったらしい。  
Cランク任務 オーガー退治をやって欲しいんだけど」

そしてフロントは

フロント「依頼された任務。こなしてみせる！」

フロント「この任務。コレをクリアできれば大量の依頼金が入るんだ」

そしてティンクは

ティンク「私の装備、私の装備」

そしてブルースは

ブルース「この家宝の力を使っても任務はやる」

リンは



リン「ボク達、ブロントファイターだもんね」

4人合わせてブロントファイター。草原へ向かった。

スライル「馬鹿ツドム。俺様が止めに行く」

そしてツドムは

ツドム「魔王軍第一軍のリーダー。ツドム様に何を言うんだ。お前は殆どただのスライムだぞ」

そしてスライルは

スライル「お前なんて馬鹿で鈍間で弱い駄目駄目リーダーだよ。俺様こそ本当のリーダーだ『水竜大爆破』」

ツドムはこの攻撃を危機一髪でかわした。

ツドム「助かったあ……」

スライル「ツドムの宝玉よこせ。そうしたら食い止めに行く」

そしてツドムは

ツドム「魔王様からもらった宝玉だよ。コレは渡せないな」

そしてスライルは

スライル「仕方ない・・・良からう。かわりのお前のバトルアクスと

アクアバトルアクスに改造してやるからな」

バトルアクスはアクアバトルアクス（水竜突撃が出来る効果があるバトルアクス。威力も強い）に変化した。

スライル「いつてくるよ。僕は貴方の手下だ。」

## 第4話 スライルとの戦い

リン「テンミリオン小説が多すぎてミッションも起動だと両方消滅するから小説達が20の後過去ログに行くという仕組みになっているんだよ。」

リンは雑学をブロント達に言った。

そしてスライルが現れた。

スライル「僕はスライル。友達のスラッシュを痛みつけたお前達を殺す！」

そしてリンは

リン「どうせスライムじゃん。ボクらには負けるわけが無い」

そしてブロントとブルースは

ブロント「俺らブロントファイターの力を見せてやる。」

ブルース「僕らはオーガー退治に来た。スラは雑魚だ」

そしてスライルは飛び上がって襲った。

スライル「ゆ・油断大敵だ『アクアトルネードマシンガン』」

海の水が大量にトルネードになりマシンガンのようにブロント達を襲う

フロント「ヤヴァイ『エレキ』」

そしてブルースは

ブルース「すごい守りだ『水壁』」

スライル「あの少女様からもらった武器だ」

そしてその頃夕陽は

夕陽「（あの少女様からもらった武器だって天罰を起こすしかないな）『ダークネスフレアメテオ』」

そしてスライルは

スライル「トドメの一撃だ『アクアマダン』……………」

スライルはすぐく高温の闇の隕石に押し潰された。

フロント「やったぞ」

そしてブルースは

ブルース「すごい。誰がやったんだ。」

そしてガイ・ガーダは

ガーダ「私だ（別名誰だし）」

そしてブルースは

ブルース「あの人がやってくれたんだ。」

すごく勘違いしているスライルだった。

スライル「おのれー。この本は燃え尽きたし。僕の技でツドム軍のリーダーになってやる。」

## 第5話 ブロンとファイターズVSツドム

そしてブルースたちはガイ・ガーダを逃がしてオーガーを倒しに行った。

ツドム「3人。それぞれ回復の杖。ハチマキ、投槍を守れ」

ゴブリン達はオー

ブロント「行くぞー」『エレキ』」

回復の杖を手に入れた。 誰につけますか

そしてティンクは回復の杖装備

ブルース「僕こそ。強い」『アクア』」

そして投槍を手に入れた。

リン「ボクはエビルスレイヤーのようにがんばる」『気孔破』」

そしてハチマキを手に入れた。

リン「やったー」

ツドム「ツドム軍は最後の時がお前らを手下にするかだ。負ければ手下になる覚悟です。」

そしてブロントは

フロント「俺らが勝利すればツドム軍のボスが仲間。すごい事じゃん『サッダー』」

そして電撃の攻撃がツドムを襲う

スラッシュ「ツドム軍には僕もいるんだ」

スラッシュは電撃それ程効かなかった。

スラッシュ「僕の体に入っているゴムの力で威力も守りもパワーアップだ。」

そしてリンは痛かった。

リン「仕方ない『又龍』」

リンの気から青い龍と赤い龍が出てきて交じり合いスラッシュを襲う

スラッシュ「僕は退却」

そしてスラッシュが逃げた。

ツドム「俺には勝てない！」

そしてフロントは

フロント「全力で行くぜ『エレキ』」

そしてブルースは

ブルース「矢よりも『アクア』」

そしてリンは

リン「一気にけりをつける『巨大虎大突撃』」

そしてティンクは

ティンク「この技はどうかなあ『ファイア』」

そしてツドムは負けた。

仲間にして悪さを告白させて任務が終了した。

しかしリンは3日間寝たきりと言う結果となった。



## 第6話 シルバーランスツドム軍の噂（前書き）

新しい章です。

物語はまだまだ序盤ですが……

番外編なんだけどね……

## 第6話 シルバーランスツドム軍の噂

ダークライズ「くっ。俺でもこの任務は難しい。Bランク任務って少し如何様だと思う」

ダークライズはBランク任務のシルバーランスツドム軍退治をどうしても倒せず逃げ出したらしい。

シャーサク「フッ。ダークライズさんもダメか・・・」

そしてブロント達が入ってきた。

ブロント「今日は任務少ないぞ。Dランク任務を2つやろう」

リン「C無し。Bはシルバーランスツドム軍ねえ。ボク達はD2つだけじゃ少し物足りないかも」

そしてツドムは

ツドム「Bランク任務。人権違反だよ。俺の名前を軍に使うなんて許可は下りていない。俺の軍は無くなりブロント様へ忠誠誓ったし」

そしてブルースは

ブルース「今日はAクラス任務が多いよ多い。」

そしてブロント達は二つのDランク任務へ向かった。

\* \* \*

フロント「おじさんへ芋の掘り手伝いが1つ目の仕事だぁ。」

そしてブルースは

ブルース「簡単。」

そして仕事をした。

報酬は18エルドだった。

ツドム「猛一つは野生のキラビーの毛を手に入れろか。簡単だぜ」

報酬は48エルドだった。

そしてフロントは

フロント「食事も出来ん。このDクラス任務。Dの中でも簡単な仕事とは。トホホ」

そしてリンは

リン「ボクたち。このBランク任務やってみようよ依頼金5000エルド。すごいお金だぞ」

そしてフロントは

フロント「俺。その任務やばい気がするんだ」

\* \* \*

そして戻ってきた。

スウェン「俺の飯ウエンボルヒーと言うグループ。仲間が死に僕も任務に就けないほどの大怪我したんだよ。Aランク任務を何回もこなしている実力あるのに……」

この任務を挑戦した人12人がボロボロだった。

リン「ボクらがこの任務するしかない」

そしてツドムは

ツドム「俺の名前を使う奴はあのスライルの野郎ぐらいしかいない。元部下の奴だ。」

そしてシャーサクは

シャーサク「悪口も言うスライムだからな。僕も仲間として戦おう」

そしてブルースは

ブルース「シャーサクさんってすごそうだと思っていたんだよ」

そしてジャガージュン市と言う都市へ向かった。

## 第6話 シルバーランスツドム軍の噂（後書き）

ジャンプスーパースターズと言うゲームソフトのキャラクターっぽい言葉もあるかもしれません……

## 第7話 シルバーランスツドム軍との戦い

ここはジャガージュン市。そこへあくの悪者シルバーランスツドム軍が襲ってきたのだ。

スライル「銀時、カズキ。僕ら3人シルバーランスツドム軍がこの町を滅ぼす事にした」

こいつはスライル。シルバーランスツドム軍のリーダーだ。

銀時「やれやれ」

こいつは坂田銀時。シルバーな奴で怒る事多し

カズキ「遊戯とは違うんだ。サンライトの力で滅ぼしてやる。滅する」

こいつは武藤カズキ。武藤遊戯ではない。槍を使う少年だ。

スライル「フッフ。滅ぼす為に技を使うぞ」

スライル「フフ。『アクアトルネードマシンガンスラッシャー』」

この技は上級水技の中でも特に上の威力を持つ技だ。

ハマー「この町を守れない」

そしてハマーは死んだ。

銀時「銀の魂の力を持つ俺は最高だ『月臨遂』」

すごい力が銀色になりすごい威力がジャガージュン市を切り裂く

カズキ「これでどうだ『サンライトクラッシャー』」

ドツカーン

スライル「これでトドメだ『アクアマダンテ地獄絵図』」

ジャガージュン市は廃墟となった。

ブロント「これまでだシルバーランスツドム軍。俺らブロントファ  
イターが倒す。」

ツドム「俺はツドムだ。名前を奪うのは人権違反だぞ」

そしてスライルは

スライル「俺様はこの雑魚オーガーと戦う。お前ら2人は他の奴ら  
を倒せ」

そして銀時は

銀時「わかりました。」

カズキもわかったらしい。

スライル「フッフ『アクアブレス』」

そしてツドムは

ツドム「オレはな、土属性中級技をがんばって習得してやったぜ」

スライル「土は水に弱いのに土覚えるのか。やはりツドム軍は俺様がリーダーだな。」

そしてツドムは

ツドム「お前を倒す『クエイラ』」

地面が割れてスライルを襲う。

スライル「空を飛ぶぞ『クオーターバリア飛び』」

スライルを守っている水が空を飛んだ。

スライル「これでボロボロだぞ『水潰』」

ツドムを水が大量の圧力で包み潰す。

ツドム「防御技も使えるぞ『アースバリア』」

そしてスライルは

スライル「コレで今度こそ死んだな。『水竜大暴走大爆破』」

そしてツドムは

ツドム「ぐっ。まだまだあ『アースヒール』」



その頃他の奴らたちは

フロント「この技で『サンダー』」

そしてカズキは

カズキ「この槍でこんな雑魚技ぐらい受け流してくれるわ」

そしてこのサンダーは無効となった。

ブルース「いけえー『アイス』」

氷が銀時を襲う

銀時「寒いあやあーーーーー」

そこにシャーサクが現れた。

シャーサク「絶対ブルースとマゼンダは結婚して子供を産むんだ。  
某店関係小説の話だよ!!!!『ホイミ』」

シャーサクの手に靈気の手刀が出来て攻撃力が大幅に上がった。  
それがカズキを切り裂く……

## 第7話 シルバーランスツドム軍との戦い（後書き）

この戦いは続きます。

第2章シルバーランスツドム軍の噂は次で終わります。

## 第8話 戦いの終結……

そしてカズキは

カズキ「この霊気はやばいな。早めに潰す『フルパワーサンライトクラッシュヤーエコー』」

そしてシャーサクは

シャーサク「ぐつ。結構効いた。『ドラーシャ&ピュースル召喚』」

ドラーシャ「このカズキって野郎殺しますか。」

ピュースル「ご主人さま。カズキを殺します。」

そしてカズキは

カズキ「ドラーシャ？、ピュースル？。こいつらって雑魚だろうな。」

カズキはその龍と色の神・ドラーシャと合金と宇宙の神・ピュースルを見くびった。

ピュースル「風技を少し使ってあげましょう『エアロマザー』」

そしてカズキは

カズキ「これってあの超上級魔法か」

そしてピュースルは

ピュースル「ただの中級魔法だよ。」

カズキは超上級レベルの威力だと思った。

そして

ドラーシャ「火炎をやってやる『ファイアーマグナムシュート』」

そしてカズキは燃えきった。

銀時「シャーサクとやらは最高級の霊気を持っている。交渉しかない」

シャーサク「銀時を倒すよ『光の棘』」

そして銀時は結構ダメージを受けた。

シャーサク「残りは4人で戦っておけ」

\* \* \*

ツドム「やべえ『アースシュガー』」

そしてスライルは

スライル「『アクアメチルバリア』」

そしてこの攻撃は100倍でツドムに返ってきた。

ツドム「ぎゃあああああああああああああ」

そしてシャーサクが現れた。

シャーサク「これで復活させてあげましょう」ザオリクアレイズデ  
ツドム」

ツドムは復活した。

シャーサク「スライル。お前は逃げろ。そして世界の平和にするた  
めにがんばれ」

\* \* \*

銀時「俺には技が無いじゃないか……」

そしてブロントファイターのメンバーの攻撃連続で銀時はおびえて  
逃げ出した。

ブロント「任務成功だな」

そしてツドムは

ツドム「スライルは反省してくれたし」

そしてシャーサクは

シャーサク「予想どおり。」

そして元の場所に戻ろうとした。

ティンク「私だって経験値つみたい。」

ブロント「ダメだ。早くもとの場所に戻らなきゃ」

## 第8話 戦いの終結……（後書き）

次回作 1 / 2 ページで日常編

その後第三章バジルとの出会い。 ティンクの心境で行きたいと思いません。

## 第9話 繁華街での出来事（前書き）

バジルとの出会い。ティンクの心境の物語の序章に過ぎない。  
フロントファイターでは色々な任務があるがこの話は任務での帰りの話



## 第9話 繁華街での出来事

俺らは任務を終了した。

ティンクが経験値を得たいが我慢した。

しかし、繁華街が近くにあり、ティンクがどうしても言ったから仕方なく、その繁華街へ経ちよった。

それがその大事件の発展だともしらずに……

ティンク「この人形欲しい。ブロント買って。」

俺らは繁華街の有る店の前に来た。

ティンクは人形がかなり素敵に思い、それが欲しかったようだ……

ブロント「ダメだ。お金の無駄だ。」

俺にはお金はあまりない。

この任務が終わり、ギルドへ戻れば大量の報酬を貰え、かえるけど。

人形欲しいティンクをよそに仕方なく行った。

ティンク「ブロント。知らないっ」

そしてティンクはブロントから走り、離れた。

ティンクはこの繁華街で近くににいる人にぶつかってしまった。

ティンク「ごめんなさい」

バジル「いいよ、いいよ。貴方は可愛いみたいだし、この人形でも

買ってあげよう。」

ティンク「有難う。貴方って良い人みたい。ブロントさんとは違って」

バジル「お前と一緒にこの塔に行きたいんだけど。ギリギリまで攻撃してトドメはお前に刺す。どうだ」

ティンク「知らない人についていくのはよくない」

バジル「経験値をかなり得る事が出来る方法だよ。レベルアップすれば欲しい物いっぱい買えるし、仲間も喜ぶと思うよ」

ティンク「やったー。ついてく、ついてく」

ティンクはバジルと呼ばれる少年についていった。  
それがワナとは知らずに……

## 第9話 繁華街での出来事（後書き）

ナルトの波の国とかデュアン・サークとかシフトアップネットのデ  
ンミリオンとかパクっているところもあるがこれからもよろしくお  
願いします。

第10話 塔の門……（前書き）

人気が無いかもしれないが人気を増やす為に頑張っています。

## 第10話 塔の門……

ティンクはバジルと呼ばれる少年へついていった。  
北にある塔にやってきた。

バジル「門番。通るよ」

バジルはあの門番とはかなりの友好を結んでいた……

門番「わかった。」

バジル「それと、他の人が塔に通らせてとか言ったら全力でとめてください。」

門番はバジルのいう事を熱心に聞いている。  
私とバジルは塔へ向かった。

\* \* \*

その頃俺達は

ティンクを探して歩いていると一つの手紙が落ちてあった。

ブロント「ある人どこかに行ってきます。財宝も手に入れ強くな  
って帰ってきます。【ティンクより】」

ティンクの手紙のようだった。  
だが、やな予感がしてならない。

ブルース「こういう事は騙されていると思っ

リン「ボクらは仲間じゃない。それなのに1人だけ行くのは良くない」

ティンクだけではなく、シャーサクさんもいなくなっていた。

ツドム「ティンクとシャーサクがいない。」

俺の考えた事。ティンクを探すならあそこに塔の門番がいる。その人ならば近くでティンクを見ていたかもしれない……

ブロント「門番さんに聞くか」

俺らは塔の門番がいる所に歩いていった……

ブロント「こんな妖精の女の子が通りませんでしたか。」

門番「あそこへ銀髪の戦士と妖精の女の子さんが一緒に行っていたと思うけど」

ブロント「ありがとう。」

俺はその門を通ろうとした時、突然！！門番さんは俺らに槍を突き出した。

ブルース「なんだ！！」

門番「お前ら、この塔へ入るなら処刑してやるぞ！！！」

この門番はかなり怒っているようだ。

この状況からして門番を倒さない限り、この先に行く事は出来ない

というわけか。

ならば、この方法しかない！！！！

## 第11話 門番との戦い（前書き）

僕の作品の中で一番の出来かもしれない。



## 第11話 門番との戦い

俺らはその門番と戦闘するしかないと言っわけだ。  
それが答えだ。

ブロント「うおおおおお」

俺は鉄の剣で相手へ攻撃。

相手の門番は攻撃をひらりとかわした。

門番は槍で俺に攻撃。服が少し荒く切れた。

リン「ボク存在を忘れていたアルか。【相手よ、吹っ飛べ!!!】  
『気孔波』」

リンは門番に気で攻撃した。その気で門番は吹っ飛んだ。

ブルース「威力90% 命中度85%」

ブルースは思いっきり弓を引き、威力重視の矢の一撃を放った。  
敵は動けないという事は多分当たる。

当たった。急所には当てられなかったがかなりのダメージを与える  
事が出来た。

ブロント「お前を殺すわけにもいかない。仮死状態になってる!!!  
」

俺は鉄の剣のみねで相手を攻撃し、気絶させた。

そして俺らはその塔に入っていった……

\* \* \*

その頃、私とバジルさんは塔の2階に来ていた。

バジル「ここからは少し危険だ」

バジルさんが言った時にカサカサ……と言う音が聞こえた  
こうしているとティンクとバジルのところにゴブリンバットが襲っ  
てきた。

ゴブリンバット「ブヒブヒー」

そしてバジルは

バジル「ティンク、倒せるか」

そしてティンクは

ティンク「火炎よ。このゴブリンを燃やせ『ファイアーボール』」

そしてゴブリンバットを1匹倒した。

バジル「眠りのブレスを吐いて来たぞ」

そしてティンクは

ティンク「風技は弱い技。でもブレスを弾き飛ばせるし、私の得意  
分野だから……『エアロラ』」

そしてゴブリンバットは簡単に死んだ。

バジル「お前。風属性が強いじゃん。そして経験値15たまったぞ」

## 第12話 ゴブリンバット軍との戦い

グネゾーキオ「ククク。キャロルの血だけではタリン。他の少女の血も欲しい。」

そしてデビルラッシュミラクル族が来た。

ビルン「あたしのペット、グネゾーキオ。この世界を滅ぼすためには好都合だ。」

そしてドルスは

ドルス「お、俺らって初登場じゃないか。テンミリオンお絵かきに発表されたい。」

そしてビルンは

ビルン「ゆんチームのポケデータにあたしは書いてもらったよ。」

そしてティンクとバジルの話に戻る

\* \* \*

ゴブリンバット「俺ら10匹。お前ら2匹。ゆური、有利」

バジル「一緒にがんばろ！」

バジルは少しおびえているが結構目をキラキラしてティンクへ言った。

そして

ティンク「わ、わかった…」

ティンクはやる気満々だった。

そしてバトルが始まった！

ティンク「私からいくよー『ファイアー』」

炎がゴブリンバットを襲った。

ゴブリンバット「ぎゃあああああ」

1匹はまるまる燃えて墜落した。

バジル「やああー」

そしてゴブリンバットは

ゴブリンバット「ぐっ」

そしてこのゴブリンバットはコールのブレスを吐いてきた。

バジル「これぐらいなら…」

そしてどんどん倒していった。

ティンクが8匹倒したのにバジルが1匹しか倒せない。

もしかして剣の腕が無いかもしれない。

ティンク「風の技は弱いけど『エアカッター』」

簡単にゴブリンバットを倒した。

ゴブリンバットを倒した。

バジル「すごいじゃん。ティンクさん」

そしてティンクは

ティンク「レベル8って嘘っぽく感じます。」

そしてバジルは

バジル「本当はレベル3で彼女がどうしても冒険したいという理由で守る為に戦士になりました。」

バジルはティンクに告白した。

そして

ティンク「わ、わかったわ」

### 第13話 塔の裏ルート 3体の魔物

フロント「この塔で裏ルートだつて」

フロントは裏ルートを見つけて驚いた。  
そして

ブルース「やな感じるな。僕らは絶対ティンクを助けなきゃならない！」

ブルースの判断力は正しかった。  
後でティンクがやばくなりそうだ。

ツドム「スライルが絡んでいるかも知れないな。」

そしてリンはルンルン気分で答えた。

リン「でもボクらはこの道しかないんだ」

そしてモンスターが現れた。

ヘルコボルトとドラゴンゾンビとダークゴブリンバットマンが襲ってきた。

ヘル「フフフ。地獄の力で倒してやる」

ゾンビ「回復は苦手だが俺様はほぼ無敵だ」

ダークゴブリン「おい。この場所では俺様が強いんだよ」

ブルース「実は拾って隠していたエクスポーションあるから投げる」  
ドラゴンゾンの体にエクスポーションが染み出しドラゴンゾンは死んだ。

ブロント「ヘルコボルトよりもあっちだ『エレキ』」

電撃がダークゴブリンバットを襲った。

効果的中だ。

ブロント「飛行系は電撃系には弱い！」

そしてリンは

リン「ボクの新技だあ『虎波』」

そしてヘルコボルトは

ヘル「ぎゃあああああああああ」

そして

ブルース「ヘルコボルト。死んでもらう『アクア』」

ヘルコボルトにはあまり効いていない。

ツドム「とどめだ『アースシュガー』」



ヘルコボルト死亡

そして2人組が現れた。

ビルン「フッフ。あと少しでディンクはえさになる。フッフッフ」

## 第14話 最終決戦。グネソーキオとの戦い

ブロント「誰だ。お前達」

そうしてドルスは答えた。

ドルス「俺はドルスだ。ティンクは伝説の戦士だがすぐ倒せる。」

そしてビルンは

ビルン「フッフ。用意したモンスターは簡単には倒せない。ティンクを殺す作戦成功確立92パーセント。そして退散」

ビルンとドルスは逃げていった。

そしてこの先をブロント達は進み

見た映像は何か。

その頃バジルとティンクは

バジル「そろそろこのボスが登場する頃だな」

そしてティンクは

ティンク「なんだろうな」

そしてボスが現れた。

バジル「約束どおり女の子を用意した。キャロルを返せ」

そして

グネゾーキオ「この少女をもらっわ」

こいつはグネゾーキオ。蛇の怪物だった。

そしてティンクはグネゾーキオの尻尾に巻きつかれた。

ブロント達がここに来た。

ブロント「おい。この少女を放せ。俺たちの仲間だ」

そしてグネゾーキオは

グネゾーキオ「放せといわれて放す者はいない！」

そしてブロントは

ブロント「正々堂々戦うか」

そして

リン「僕達はブロントファイターだからな」

リンはルンルン気分ではなくなった。

ブルース「やばそうな気配だああ」

フロント「一気に倒すよ新技で『サンダーボール』」

電気のボールが生み出されてそれがグネゾーキオに放たれた。

そして

グネゾーキオ「ぎゃああああ」

ブルース「僕も行くぞ『アクアカッター』」

水の刃が生み出されてグネゾーキオを襲った。

グネゾーキオ「ぐるるるるる」

リン「ボクが最強だあ『双龍波』」

二つの龍の力がグネゾーキオを襲う。

グネゾーキオ「ならば『ミラクルバリア』」

バリアはほぼ意味無くグネゾーキオに大ダメージを与えた。

しかしリンは倒れた。

ツドム「コレは俺の技でしか倒せそうもないな『土封印解・アーク  
アイスシュガー』」

そしてグネゾーキオを倒す事が出来た。

しかしツドムの土技はほぼ忘れて初級技までしか出来なくなった…

バジル「キャロル、キャロル大丈夫か」

そしてキャロルは

キャロル「だ、大丈夫よ。１ヶ月ぐらい病院で休めば」

そしてバジルは

バジル「よかった。助かったよ。ブロント、ブルース、リン、ツドム」

そしてみんな喜んでティンクと一緒に街へ帰って行った。

## 第15話 新しい任務、それは（前書き）

オリジナルキャラクターとして首切り包丁を持つ男、桃木・斬が登場します。

スライル再登場。

## 第15話 新しい任務、それは

トイラーの町に戻った。

ブロント「久し振りの帰国だあ」

ブロントはたくましくなつて帰ってきた。

そして次の任務へ向かった。

そして

ブルース「Cランク任務 水の谷で橋を作っているおにいちゃんを  
護衛か。これぐらい楽勝だな」

そしてリンは

リン「ボク、やばそうな気がする」

ブロント「任務の前にはレストランで食事だぜえ」

そしてアウトレストランと呼ばれるレストランへ行った。

シェフ「美味しい料理を作ります」

そして出来た。

ブロント「う、うまそー」

ブルース「僕も食べるぞ」

リン「ボクだつて食べる」

ツドム「俺だつて」

ティンク「わたしもわたしも」

そして沢山食べ過ぎたかおる

シェフ「代金は5066エルドです。」

そしてブロントは

ブロント「量のわりに安い。ラッキー」

そしてブロントはお金を払った。

そして店から出た。

\* \* \* \* \*  
\* \* \*

その頃、水の谷では

スライル「ビルンさんがここを拠点にしてのつとれと言われた。コレはチャンス。この国の長になろう。税金は22%にする」

そして町の人々は

町人A「税金高すぎ。この国と他の国をつなぐ橋は作らせないなんて酷い」



そしてスライルは

スライル「逆らう人はこの人の預かっているお金の5%を国に無理矢理送金だ」

そして町人Aは

町人A「そ、そんなー」

そしてスライルは

スライル「フッフ。この谷の途中の道に雇った2人の人間を派遣しておくか」

そして謎の人間が現れた。

桃木・斬「ククク。ここにクル奴を倒したいのは山々だが2人の雑魚に任せるか」

桃木・斬は首切り包丁を振り回して語った…

第15話 新しい任務、それは（後書き）

ブラックジャックによろしくの 小沢<sup>おさわ</sup>も登場しますよ

## 第16話 ブロントファイター 水の谷へ

そしてブロントはこのCクラス任務を挑戦する事にした。

ブロント「Aクラス任務を達成した俺ならCランク任務怖くない怖くない」

ブロントは安心しきっていた。

しかし……おじさんは

おじさん「わるいねえ。Cクラスといっても難しいと思うから。Bランク以上の戦いだから」

そしてブロントは

ブロント「うそだろ。Cクラスじゃねえのか、おじさんよ」

おじさんは答えた。

おじさん「わしの国は超貧乏で大名すらお金を持っていない。わしは勿論持つてなくCランクぐらいまでしか払えないのお」

ブルースはそのことを聞き、怒った。

ブルース「コレは普通の任務ではないと言う事か。僕らよくそういう任務に行くからなあ。」

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

デューク「スライルさんのために」

そして猛一人は

リリア「イルミナ軍の魔法戦士のリリアーヌ・ヘルムがスライルの  
為にがんばるしかない」

リリアとデュークは待ち伏せ大作戦をしていた。  
そしてブロント達は

ブロント「この道しかないか」

ブロントは考えた。

リン「仕方ない。ボク……いや私たちはこの道行こう」

ボク娘のリンは水の谷のおじさんがいたので一人称を私って言った。  
（何故

そして

ブロント達は待ち伏せ軍と戦う事になってしまったのだ。

ブロント「俺ら、新技を習得したし」

そう、俺らはさらに強い魔法などを覚えたんだ…

## 第17話 水の谷での死闘。悪き人々

デューク「お手柔らかに」

リリア「ころすわっよ」

ブロント「2人さっそく登場か」

ブロントは敵軍を発見した。

敵は一人は戦士系か、もう一人はイルミナ軍の制服のようなものを着ているようだ

デューク「奇襲攻撃だ『臥竜閃』」

地面すれすれで真空波が俺を襲った。

ブロント「ぎゃあああああああああああああ」

俺は体全体から血が出るほどの大怪我を負ってしまった。  
息も苦しく、痛さが耐えられないほど……

ブルース「ならば回復するか『ヒールブレス』」

ブルースは水の泡を全体に出現させる  
聖なる力の泡が沢山発生し俺を癒した。  
しかし殆ど無力だったが、少しは癒えたと思う……

「お手柔らかと言って自分だけ強力な攻撃って『巨大虎大突撃』」

巨大な虎が出現してデュークを襲う。

（デューク）「強い攻撃を無効にしてやり返してやる『鳳雛飛翔』」

虎は剣に簡単に消されてしまった。

そして

リンは切りつけられた。

フロントファイター（No.51）

日時： 2006/02/21 17:07

名前：

（リリア）「イルミナ軍の手下。イルミナ兵達よ、あの金髪軍を倒せ」

リリアはイルミナ軍へ携帯電話で電話した。

イルミナ軍は兵士を10人派遣してきた。

「くっ。イルミナ軍かよ。やばいかもな」

「イルミナ軍って他の小説の世界に少し入っていないか」

ブルースは真剣な顔でフロントへ言った。

フロントは怒ってデュークへ攻撃した！

「一気に終わらせてやる『サンダーボール』」

電撃の力が込められている丸い力が発生した。

そして

「あわせ技だな『アクアカッター』」

アクアカッターがサンダーボールに合わせりあい強力な力となってデュークを襲った。

## 第18話 過激な戦い（前書き）

更新遅れ続けました。

更新スピードが遅いままなので注意



## 第18話 過激な戦い

ツドム「このイルミナ軍。お前のおさげ似合わないよ。このめがねを壊してやろうか」

ツドムはリリアに言いつけた。

リリア「エクスカリバーでこのオーガーを切り裂いてやる。まずは『ヒールブレス』」

闇の泡が出現した。フワフワと飛んできてツドムに包み込み、持ち上げて落とした…

そして

ツドム「ここから落ちたときクッションが無いとやばいな。『アイスジェル』」

土がジェルになるツドムは助かった。その時デュークとプロブルリンは

デューク「この電気&水のあわせ技はやばすぎる…俺の奥義で一気に決めさせてもらう！『紅蓮天刃』」

デュークは不安定で爆発しやすい小さい炎の玉を8個作りだしほぼ時間差無しでサンダーボール&アクアカッターへ撃ち込んだ

そしてこの技は両方無効となった。

5個のそういう爆弾がブロントとブルースを襲った…

デューク「と、トドメだ。うん」

デュークは上空からブロントとブルースを一閃しようとした。

だが…

ティンク「戻ってきたよ『ファイアーボール』」

炎の玉がデュークを襲った。

デューク「これぐらい安心、安心」

そしてティンクは後ろに回りこんだ。

ティンク「トドメだあ『エアサnder』」

風のイナズマがデュークを襲った。

そして

イルミナ兵「代わりに私がこのダメージを受け止めよう」

イルミナ兵10人の中の一人が守ったのだ。

## 第19話 シャーサクとスライルと小沢（おざわ）

その時スライルは

スライル「この水基本書を1000回読むと水魔法の威力が大幅に上がり伝説の技を1つ習得できるってあの少女から聞いたからな」

そしてシャーサクは

シャーサク「今日はウチはツール（らきすたのかみんの髪）で来たよーん、ウチは男だよーん。殺すよーん 『ピュースル召喚』」

そしてピュースルにスライルはボロボロにされた。

でも助かった。

シャーサクはイルミナ軍を察知してそこへ向かった。

スライル「だれだあ」

小沢「僕は小沢と申します。学校ではずっと真面目に働き店では仕方なく万引きをするしか無く病院に釈放は苦労して野菜屋でライブドアの社長にしてもらって小沢カンパニーにした小沢です。この町と貴方の雇用した人々を全て頂きます。」

小沢のせいで支配していたスライルの陣地を取られた。

スライル「ブラックジャックによろしくを見ると良いよ」

\* \* \*

シャーサク「フツ、イルミナ軍の9人の皆さん。お前達の故郷を見つけた。エレンシア戦記の世界だろ。そこへワープしてもらおう。」  
『googleパワー』」

謎のパワーでイルミナ軍の兵士9人は消えた。

リリア「あわわわわ。私の仲間達が全て消えた。」

そしてシャーサクは

シャーサク「お前は少しアリソンに関係あるがれっきとしたオリキヤラだ。助けてやろう。ただのオリキヤラ募集で取りこぼされた奴とかだろう。」

そしてシャーサクは観戦する事になった。

ブロント「やったー。あとデュークとリリアだけだあ『サンダーボール2連発』」

デュークとリリアに致命傷のダメージ。

ツドム「1回だけなら・・・『地割れ』」

デュークだけを飲み込んだ。

リリア「イルミナ軍の本当の力を見せてやる！」

リリア「疲れたー」

リリアは逃げた。

## 第20話 桃木との戦い！！！！

小沢「クツクク、桃木・斬よ襲ってやれ」

そして桃木・斬は

桃木・斬「デュークとリリアを倒せるつわものか。どんな物か」

そして桃木・斬はブロントファイターの場所へ向かった。

その頃。ブロントファイターは

おじさ「リーダーのスライルは超酷くて逆らうとこの人のお金を%単位で盗む超酷い奴なんだよ」

そしてブロントは

ブロント「酷いばかり言っているな馬鹿な奴だ」

そしておじさは

おじさ「お前は超悪口人間だな。超弱そうだし超ダメそうだし」

ブロントは言い返した。

ブロント「お前、死ねや」

おじさは言い返した。

おじさ「死ねを超多用に使うんじゃないぞ。少しぐらい超嫌な事があっても馬鹿も超多用に使うんじゃないぞ少しぐらい超嫌な事があっても超を多用するなと言う事だ」

そして

ブロント「俺の怒りマックスー。俺は全く超は言ってねえ」

おじさは

おじさ「おまえ、超って言っただろうが。やはり超を超多用しているんじゃないか俺と言言葉は超多用は良くないぞ。超悪いじゃん。僕って超多用に言いなさい。わかったか。金髪。超悪そうな顔の金髪」

おじさは悪みを沢山言った。

ブロントは顔が赤くなった。

ブロント「ほ、本当に殺すぞ」

そして

ザガン「わしを殺すとまごが一生超泣くよ。そして娘は超一生超トイラーの町を超恨んで暮らしていくよ」

ブルースは

ブルース「ザガンさん。貴方は本当に最悪の依頼人だ。」

フロント「おじさつて本当はあのザガンか」

そしてザガンは

ザガン「そうだ。超奥深い奈落の果てでさまよっていたが人間に戻れたんだ。そして超優しい超最高の人間になると超決心したんだ。」

そしてそこへ桃木・斬が襲ってきた。

桃木・斬「ククク。俺様に勝てるかな」

シャーサク「ひとまず逃げよー」

しかし水に包まれて出れなかった。

シャーサクは隠れた。

リン「ずるいな。シャーサクも敵も」

そして桃木は

桃木「クックク、『水分身』」

桃木は近くの水で分身を作成した。

そして

リン「ボクも久し振りの登場『竜王君臨』」

リンの気の力で竜王が出現した。



そして

竜王は桃木の分身を倒し桃木を襲った。

桃木「くっ『アクアイシールド』」

ときすでに遅し。

桃木は龍によってボロボロになった。

ブルース「これほどの攻撃を受けたらリンはボロボロだな」

黒「僕の名は黒。この犯罪者桃木を殺すチャンスをつかっていた。

」

こいつは黒。謎の少年だ。

しかし、仮面をつけており、こいつらは確か、罪人を殺したりする人  
とりあはず味方のはずだ

ザガン「超ありがとうございますぞ」

## 第21話 桃木&黒VSスライル軍団

そして黒と桃木は

黒「本当は助けてあげました。」

そして桃木は

桃木「俺一人でもこれぐらい死なずに済んだと思う」

黒は死んだと思った。

そして会話している時元ボスのスライルが現れた。

スライル「おじけ済んだな。『アクアートルネードラッシュャー』」

水の力で黒と斬はボロボロ

スライル「ビルン様、ドルス様、貴方達もこの駄目野郎を倒してくれませんか。」

ビルン「いいよ。代わりにこの水魔法の隠し技を教えて」

その事でスライルはオツケーをもらった。

スライル&ビルン&ドルスVS桃木&黒

桃木「ガーゴイル。いってよし」

そしてガーゴイルが現れた。

ガーゴイル「殺す」

そしてドルスは

ドルス「鳥は氷技にはめっぽう弱い『アイズストリーム』」

ガーゴイルはたえた。

桃木「効果抜群ではなく超効果抜群だよ。だから氷をバリアする道具を容易したんだ。」

スライル「多分岩・鳥タイプだな『アクアストリーム』」

水にはガーゴイルは耐えられなかった。

ガーゴイルは力尽きた。

桃木「俺のクロスチョップで殺してやるよ」

桃木はクロスチョップを放った。

しかし攻撃は外れた。

ビルン「桃木は格闘系人間でもありか『サイケ光線』」

サイケの力の光線が桃木を襲った。

黒「フッフ『氷鏡シールド』」

黒は氷鏡を操る少年だった。

サイケ光線はビルンに跳ね返った。

ビルン「自分たちの攻撃が特に強力な攻撃となる」

ダークライズ「闇の魔王だけど今回は正義の力で戦ってあげない。  
逃げる」

何故か：

近くに散歩したダークライズは魔王の城に逃げた。

ドルス「デビルラッシュミラクル族の怒りの力を見せてやる！」

ドルスは闇の生物に変形した。

ヨダレで地面をおにぎりに変え。強力な体で地面を揺るがしおいし  
そうな尻尾の香りが目にしみる。

デビルミラクル族のにぎりとラッシュの力を持つ強力なデビルミラ  
クル族だ。

ドルス「俺の本当の力を見せてやる」

ドルスは消えた。

黒「針で全体を滅ぼしてやる『魔氷・鏡針テンミリオン』」



黒と桃木は見えない中ドルスやビルンに殺されていた。

## 第22話 魔王戦への第一歩

白蛇¥「お金半分軍団の襲撃だ」

シャーサク「ゾーマ軍をやった事だし雑魚すぎだな¥が大文字ならテンミリオンのアイコンになったのに『ドラーシャ連続召喚』」

ドラーシャの集団が1匹のキラーズネークを襲った。

白蛇¥「ぎゃあああああああああああああああ」

そのころブント達は

ブルース「リンを運んでザガンが住んでいる町に着いた。」

リン「フッフ。ボクが用意した。ブントへ用意した針と缶。そしてアレだ。」

ブント「ひえええええええええええええええー」

ブントはリンから逃げた。

病気が治ったリンは

リン「ボクから逃げないで」

そしてブロントは

ブロント「いやです。刃物<sup>はきみ</sup>で攻撃するリンからは逃げるしかない。」

その日小沢は死んだ。

そして・・・ザガン達は平和になったが。

トイラーの町で異変が起きた。

ブロント達はトイラーの町に向かった・・・。

そこにはダークライズがモンスター軍と一緒に町を襲っていた。

しかし助かった。

















この後、プロントたちは魔王退治に旅をすることになる



## 第22話 魔王戦への第一歩（後書き）

これでプロントファイター第1部完了です。

第2部は魔王退治の旅を描き、第3部がその後の魔物退治などをしていく物語となります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5092c/>

---

ブロントファイター

2010年10月9日13時45分発行